

【要旨】

アジア・環太平洋の連続する広い領域に、Monsoon Asia という気候を背景にした文化的共有現象が認められる。その領域には、文化人類学的共通性のほか、言語においても、共通する現象や、同語源の蓋然性の高い単語の分布が認められる。(この領域を「Monsoon Asia Cultural Sphere MA文化圏」と名付ける。そのユーラシア大陸側の文化境界線を、動植物分布境界線命名に倣い、「Monsoon Asia—ABE—Line」名付ける)。

また、このM. A. 領域の東アジア地域では、気候の寒冷・温暖の格差が南北の文化を2分している文化境界がある。その南北境界線は、日本列島の南北方言分布境界線(気候線)と、朝鮮半島の方言分布境界線、及び、中国の「秦嶺—淮河線 Qing-Ling=Huai-river=Line」を結ぶ、一続きの文化境界線を形成している(「Monsoon Asia Central Climate Line M. A. 中央気候線」と名付ける)。

Monsoon Asia 文化圏の中において、この Monsoon Asia 中央気候線以北は、日本・韓国・北朝鮮・中国それぞれの北半分が同じように含まれ、「東北アジア」的な共通の文化特徴をもつ領域と位置付けられる。また、いわゆる東(東北)アジア文化研究においては、国単位の相違の背後に隠れている文化特徴として、日本・韓国・北朝鮮・中国の三国が共有しているこの「アジア北方文化」「アジア南方文化」という「東西横並びの共通文化特性」にも、注意を向けて研究していく必要がある。

21世紀のアジア文化研究は、この Monsoon Asia Cultural Sphere (MA文化圏) というアジア・環太平洋領域を視野にいれていく必要がある。将来的には、この領域を研究する「モンスーン・アジア文化学会」が必要となろう。

◎朝鮮語(韓国語)・中国語・日本語の成立背景に関する現在の研究水準

◆中国語は、その声調 tone が後代の発生であるという説がある(Matisoff James A. 1973, 1998)。Matisoff は、シナ・チベット語は、当初、子音と母音が整然と配列された、tone も pitch もない単一音調の単音節言語であったが、それが後代に語頭または語末の子音の音韻対立の消滅の代償として声調の対立が生じたとする。

「In the beginning was the Sino-Tibetan monosyllable, arrayed in its full consonantal and vocalic splendor. And the syllable was without tone and devoid of pitch. And monotony was on the face of the mora. ……」

◆朝鮮語(韓国語)には、非アルタイ語の基層言語があるという説がある(金 芳漢 1983 ソウル、1985 東京)。「原始韓半島語(基層)—アルタイ語(上層)」説

「韓国語はアルタイ語系でありながらも、非アルタイ語である基層言語、すなわち原始韓半島語の影響を受けている蓋然性が高いのである。／原始韓半島語はある種の古アジア語と関連のある蓋然性が高い。」

◆日本語の系統は、世界的研究水準において現在も未詳であるが、崎山理 1990『日本語の形成』以降「重層説」で検討するのが日本では主流になった。

◆MA文化圏に分布する古い共通言語現象が、これら三言語に共通する基層言語であった可能性がここに指摘できる。